The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	はじまりの場所 ： 臨床哲学との出会いをつうじて
Author(s)	小西, 真理子
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2021, 3, p. 49-56
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/79248
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

特集２　2019 臨床哲学・哲学プラクティス国際セミナー＆ワークショップ

はじまりの場所――臨床哲学との出会いをつうじて

小西　真理子

１　「今」の重み

ある学会の発表で、「あなたがいう倫理はどこからやってくるのですか」と質問されたことがある。いつも具体的な諸問題について考察していたわたしは、そこに生じている倫理的なものに言及することを主にしていた。そのため、研究を遂行するにあたって、倫理の根源について深く考える必要性に迫られたことも、徹底的に考えたこともなかった。「どこなんでしょうか……」とわたしは少し戸惑った。院生のころの重要な審議の場で、「あなたの研究の基礎理論は何ですか」と聞かれて、「一番嫌な種類の質問がきた」と思いながら「まだ見つけていません」と答えたことを思い出した。

わたしが論じたり語ったりしている倫理はどこからきているのだろうか。知識豊富な倫理学者たちに眺められていたわたしは、緊張に負けないように発表モードの仮面を手放さないように意識していた。そんななか、聴衆のなかに何人か、わたしに対して倫理学理論に基礎を見いだすという仕方を求めてこなかった人たちの顔も見うけられた。それに後押しされたのだろう。わたしは「あっ」と思いつき、極めて曖昧な応答をした。「本で読んだり、テレビで見たり、そういう時ではなくて、誰かに出会って、その人が言うことをつうじて、常識とされていることに違和感をもったときにやってきます。そういう人が目の前にいるとき、その人から、その個人から、突然現れて来るものだと思います」。

聴衆のなかには、わたしの応答が非論理的だと思った人も、言っていることの論証や基礎づけが必要だと思った人がたくさんいただろう。倫理学理論として成立していないとはっきりと言い切れるような答えだったと言えるだろう。そのことはいつでも、今でも、予感している。でも、質問者を含め、会場の数名の倫理学者から、あたたかいまなざしが送られていた。場違いに感じられるような発言も、少し変わったテーマの研究も、数名のそういう人たちが、ときに様々な仕方で発してくれる「わたしはあなたの言葉を受け止めました」というメッセージによって支えられてきた。今でも立派で知的な研究者になりきれないわたしは、どこか常に劣等感をもっている。それでも、自分の抱える、劣等感や責任に押しつぶされなかったのは、ひとり以上の支え手がどこかに存在してくれていたからだと実感している。これまでわたしが、この業界と接する場で発したひとつの発言をとっても、それがどれだけの他者に支えられていたことだろう。

これまで「受け止められた」という経験を繰り返すことで、わたしは自らの倫理観を正直に語れるようになっていった。この幸運をどう受け止めたらいいのだろうか。これが標準だ

ったらいいのにと思うのだけれど、そういうわけではないのだと知る機会が多々ある。否定的な空気はどこにでもあったけれど、各課程の指導教員の方々をはじめ、わたしの研究を評価してくれた人がどこかにいてくれた。それだけで十分だった。今のわたしには、これらの事実が、とても重い。

２　「臨床哲学」と出会う

臨床哲学は、1998 年に大阪大学大学院文学研究科の「倫理学」研究室の看板を「臨床哲学」にかけ替える形で登場した。臨床哲学を広めた鷲田清一さんは、1999 年に出版した『「聴く」ことの力――臨床哲学試論』で「哲学はこれまでしゃべりすぎてきた」（p.16）と述べ、語るのではなく、聴くことからはじめる哲学について試みた。個室にこもり、ひとりで文献と格闘するような哲学ではなくて、人びとが苦しんでいる「現場」から考える（＜外＞へ向かう）哲学を提唱したのだ。古代ギリシアに想いをはせれば、哲学が「対話」とともにはじまったということが確認される。

> 哲学が論文や演説からはじまるのではなく、だれかの前で、だれかとの語らいとしてはじまったということ、そのことが重たいのだ。だれかの前で……。つまり、それははじめから他者の前での行為として起こったということである。ここでわたしたちが考えてみなければならないのは……哲学を、《反省》という、他者が不在な場所ではなく、他者との関係という場に置きなおしてみることだ（p.31）。

臨床哲学は人びとの「苦しみの場所」とでもいうべき場所において、哲学的思考をもって、「名前をもった特定のだれかとして、別のだれかある特定の人物にかかわってゆく」(p.54)。鷲田さんによれば、《臨床哲学》は三つの「非 - 哲学」ないし「反 - 哲学」的な視点に立つ。第一に、「《臨床哲学》は論じること、書くこととしての哲学ではなく、〈聴く〉といういとなみとしての哲学を模索する」こと。第二に、「《臨床哲学》はだれかある特定の他者に向かってという単独性ないしは特異性の感覚を重視する。つまり、普遍的な読者に対してではなく、だれかある個別のひとに向かってする哲学」であるということ。第三に、「あらかじめ所有された原則の適用ではなくて（つまり、その原則に一致しているかいないか、それとの整合性があるかどうかではなくて）、むしろそういう一般的原則が一個の事例によって揺さぶられる経験として哲学の経験をとらえる」（p.107）こと、この三つにおいて、臨床哲学は「哲学」だとされているものとは異なる。

わたしは 2018 年 4 月に大阪大学大学院文学研究科の臨床哲学に講師として着任した。着任後 1 年以上が経過してから『「聴く」ことの力』を再読したとき、この場所に来る前に著書を読んだときにはまったく感じられなかった空気が全身を包んだことが忘れられない。その空気はいくら「文献読解」したとしても、ここに来る前のわたしには絶対に読み取るこ

とができなかっただろう。時を経て著書を読むことで、臨床哲学研究室が発足から 20 年以上が経過するなかで、さまざまな変化や変革、葛藤、衝突などがあったことが前よりずっと現実的にうかがえた。いろいろな意見があると思うけれど、この研究室では、鷲田さんの試みる「臨床哲学」がひっそりとひそかに呼吸しているのを感じる。このような思想をもち合わせている研究室で、わたしは、着任前の研究生活のなかでは一度も語る必要性を感じたことがなかったこと、むしろ語っても気に留められないだろうと思っていたことを、語るように求められることや、自ら語ろうと思うことがしばしばあった。そうするなかで、いままでの研究生活においてわたしがまったく語ってこなかった部分にこそ、わたしの研究がはじまる／はじまった場所があるという事実を突きつけられることとなった。

発足から 20 年以上経ったけれど、いまだにこの研究室は「臨床哲学が何か」という答えをもち合わせていない。いや、むしろ臨床哲学に確固たる定義を与えることこそ、臨床哲学的ではないのではないか。そんなこと考えなくてもいいのではないか、と思うことさえある。哲学は、名前をもった特定の「あなた」と他でもない「わたし」が関係するという営みをとおしてはじまるものだという立場は、わたしにとってなじみのあるものだった。臨床哲学をそういうものとして捉えるならば、あなたが誰でわたしが誰かによって、そこに生じるものは変化するため、その定義が普遍的なものになること一度たりともありえない。同じ「わたし」や同じ「あなた」だって、時と共に多かれ少なかれ変化していく。

> だれと遇うのか。そのだれがそのつど具体的な特定の他者であって、他者一般ではないということ、このことは〈臨床〉にとって決定的な意味をもつ。なぜなら、じぶんがまみえているその他者がだれであるかによって、そのつど〈臨床〉の場の構造が変わってくるからである（pp.102-103）。

定着しつつあった思考が根本からバラバラに分解されるような経験をするのは、その前提とは異なる「特定の他者」を目の前にしたときや、「特定の他者」が必死に何かを伝えようとしているとき、そして、「特定の他者」が何か悲鳴をあげたときだけである。わたしが書いてきたことのほとんどすべてが、そういった経験からはじまっているし、その書いてきたことが根本から揺さぶられるのは、そこで書いてきたことと別の前提をもつ「特定の他者」に出会ったときだけである。その経験は、わたしにとってもつらく、痛く、苦しい経験となることもある。自分を否定されているような気持ちになることもある。でも同時に、その先には少し違う自分が存在するような気もしている。何か鍛錬しているような気持ちになることもある。自分を更新できることは大変な喜びであるし、何よりも以前なら「大切な他者」に応答できなかったことにたいして、その一部にでも何か応えられたと実感できたときは生きてきてよかったと思う。

「あなたの研究の基礎理論は何ですか」という問いに答えにくい理由がわかったような気がする。わたしには「研究の基礎理論」などなかった。基礎理論を持ち続けることができ

ないと言えるのかもしれない。基礎理論への信頼は、ときに「他者」との出会いをじゃまするものでもあるとさえ思っているところもある。その理論は、場合によっては、「特定の他者」を基礎理論の枠のなかに押し込めてしまう。基礎理論は必ずどこか「わたし」や「あなた」と違うものであるから、多くの場合、その理論を学ぼうとしていたはずのわたしは、途中で関心がどこか別のところに移ってしまう。だから基礎理論研究が得意な人やその視野で知識に触れることのできる人びとに憧れさえをもっている（わたしがこういう心境にあるのは、わたしの身近な基礎理論研究者がわたしを無視したり排除したりしてこなかったからだ、ということは強調してもしすぎることはない）。基礎理論というよりも、「たった一人の他者」がもっている限りなく大きな広がりこそが、わたしを捕らえてきたのだと声に出したとき、その言葉を受け止めてくれるような気がするのが、臨床哲学という場所だった。「研究の基礎」、言いかえれば、「研究のはじまり」は基礎理論ではなく、わたしが出会った「名前をもった他者たち」なのだ。

３　共依存研究の語り方

３－１　研究紹介

私はこれまで、人間関係における病的な嗜癖的症状および嗜癖的関係性である共依存（codependence）を研究し、そのような関係性が引き起こす諸問題について倫理的考察を行ってきた。1970 年代末、アメリカのアルコール依存症の臨床において、セラピストたちは、アルコホリックの周囲には自らの生活全てを賭けて彼らを支えようとするイネイブラー（enabler）がいることに気がついた。イネイブラーはアルコホリックから依存されることに依存しているため、彼らの症状の回復ではなく病理を促進する行動を無意識にも取ってしまう。したがって、一見アルコホリックを心身共に支えているかのようにみえるイネイブラーは、実は「アルコホリックの支え手」どころか「アルコホリックの病気の支え手（アルコホリックであり続けることを可能にする人）」なのである。このような観察から、アルコール依存症の専門家たちは、アルコホリックからイネイブラーを引き離すことがアルコホリックの回復にとって重要なことを発見したのである。イネイブラーに類似する症状は、イネイブラーの個人的症状に留まらず、アルコホリックとイネイブラーのような関係性という意味も含む共依存と呼ばれるようになった。

このような経緯から生まれた「共依存」というものは、従来の研究や医療・心理・福祉実践などによって、完全に否定的なものとして捉えられ、その関係性から生じる諸問題の解決にあたっては分離策のみが正当化されてきた圧倒的な傾向がある。しかし、共依存関係にある DV 被害者のなかには加害者との分離を一切望んでおらず、別れずに暴力から抜け出す方法を知りたいと願っている者が存在する（あさみまな 2010『いつか愛せる――DV 共依存からの回復［新版］』朱鳥社）。別れることを望んでいなかった被害者たちは、分離を「強要する」援助政策に抵抗する。命の恩人であるはずの支援者たちを裏切り、次第に「加害者」

の元へ帰っていく者が後を絶たない（斎藤学 1996『アダルト・チルドレンと家族――心のなかの子どもを癒す』学陽書房）。数々の研究によって、DV シェルターで保護された 50 から 60%の DV 被害者が、自ら DV 加害者のもとへ戻っていくという報告もされている（Peled, E., Eisikovits, Z., Enosh, G. & Winstok, Z. 2000 “Choice and Empowerment for Battered Women Who Stay,” *Social Work*, 45 (1)）。内閣府男女共同参画局（2018）による「男女間における暴力に関する調査報告書」によれば、これまでに配偶者から何らかの被害を受けたことのある人（650 人）に、その行為を受けたとき、相手との関係をどうしたのかを聞いたところ、「相手と別れた」が 10.8%（女性 12.6%、男性 7.2%）、「別れたい（別れよう）と思ったが、別れなかった」が 36.6%（女性 44.5%、男性 21.5%）、「別れたい（別れよう）とは思わなかった」が 33.4%（女性 26.7%、46.2%）となっている（残りは無回答）」（内閣府男女共同参画局 2018「男女間における暴力に関する調査報告書」内閣府男女共同参画局ホームページ，p.34 （http://www.gender.go.jp/policy/no_violence/e-vaw/chousa/h29_boryoku_cyousa.html：最終閲覧日 2020 年 12 月 29 日）。その理由として、「子供がいる（妊娠した）から、子供のことを考えたから」、「経済的な不安があったから」、「世間体が悪いと思ったから」、「相手が変わってくれるかもしれないと思ったから」などがあげられている。そのような状況を受けて、国家による強制的分離の必要性が訴えられるようにもなってきている。しかしながらアメリカのフェミニスト法学者であるリンダ・ミルズの研究で明らかになったのは、アメリカで現在実施されている国家による強制介入を保証する政策こそ、被害者たちを苦しめる場合があるということだ（Mills, L. 2008, *Violent Partners*, Basic Books）。また、物質嗜癖研究における自己治療仮説によれば、嗜癖者は死にたいほどの苦しみを抱えながらも、嗜癖することで耐えがたい心理的痛みから自らの意識を守り、過酷な今この瞬間を生き延びることができている（Khantzian, E. & Albanese, M. 2008, *Understanding Addiction as Self Medication*, Rowman & Littlefield Publishers）。これと同様に、（第三者の目には危ういものとしてしか映らないとしても）共依存関係には当事者が感じずにはいられないような肯定性（愛）があり、その肯定性が当事者の生を可能としているような事態が存在する（小西真理子, 2017『共依存の倫理』晃洋書房）。このような人びとを救うには分離策だけでは不十分である。

以上の研究背景から、共依存関係のような病理的とされる関係性にも肯定性があることを明らかすること、そのうえで、共依存的な関係における諸問題に対する分離とは異なる解決方法を探ることを目的に研究してきた。本研究の特色は、従来の個人主義に内在する「自立的な主体が、互いを尊重しながら関わり合う」といった関係性のみを肯定する倫理観に異議を唱えたことである。依存や関係性を重視するケアの倫理や修復的正義について考察を深め、これらの理論にさえも自立主義の倫理観が内在していることを論証し、この倫理観からさえも否定される関係性にも肯定性があることを提示した点が、本研究の独創的な点である。

３－２　共依存研究のはじまり

共依存研究を本格的にはじめた博士課程後期課程において、ときどき研究者たちを困惑させるような自由な文章を書いていたわたしは、アカデミズムの作法を一から勉強しはじめた。今まで自分が書いてきた文章では、わたしが言いたいことが、特に、わたしと異なる考えをもっている人には全然伝わらないことがわかったのだ。文章を書くときは、必ず誰かを思い浮かべながら書いていた。この部分はあの人とあの人。この部分はこの人。そう思い浮かべながら書いた集積がひとつの文章だった。そういった人たちと関わることで生まれた思想を忠実に表現しようとすると、どうしても自由作文のようになってしまう。伝わる人にはすごく伝わるのに、極一部の感情を共有できるような人は涙を流しながらその文章を読んでくれるのに、多くの研究者には全然、まったく、少しも伝わらない。

研究者たちが研究者業界の言語や理解で世界を語っているとき、「研究者たちは、自分たちが世界のなかのほんの小さな集団のほんの一部の存在であることを忘れている」と思っていたことを思い出す。2011 年に執筆した申請書の自己アピールの箇所で「知識人のみで構成される学問は、非常に不安定なものである。研究者は人類のごく僅かであり、学界を越え、実社会の現実を常に認知していなければ、研究者による研究成果は理論として学問領域のみに留まってしまう」と記述していた。わたしは研究者として素人だったからこそ、自分を研究者と呼べなかったからこそ、心底そう思うことができた。こういう言葉は、多くの研究者たちによって語られているようにも思えるけれど、過去のわたしを思い出してみると、わたしの言葉は、そういう言葉のなかでもかなりきつい言葉のように思われる。この言葉は、場合によっては、研究者の積み重ねや言語を、限りなく白紙に近い状態に戻すようなあり方ともつながっているようにも思えるのだ。「ザ・研究者」の雰囲気があまりなく、同時に、研究者との接点もあった若かりし日々とのわたしは、「知識ばかりで頭でっかち」、「現実を語っているつもりで何もわかっていない」、「何を言っているのかさっぱりわからない」という学者たちに向けられがちな批判を耳にする機会が比較的多く、研究業界と距離のある人たちから「そんな風になってはいけない」としばしば声がけされてきた。どちらかと言えば、過去のわたしの言葉は、研究者たちの自己反省の声よりも、非研究者たちが研究者を全然信頼していないことから発する声に近い。もちろん、研究者にも研究者の倫理がある。でも、過去のわたしが発した言葉は、今の自分に強く突き刺さる。「偉い先生」になればなるほど、そういうことは教えてもらえなくなってしまう。

院生時代のわたしは、それでも研究者になりたかったから、研究者一般に「伝わらない」表現を一部「捨てた」のだろう。あのころのわたしは、「伝える」ための文章を習得しなおすのに必死だった。まるで自分の自由が奪われるような出来事のように感じられた。無機質な気持ちになって、その文章に備わるはずだった感情を切り離してみる。「きっと、いつか取り返せる。この技術さえ習得すれば」。優れた研究文書を精読し、自分の研究に生かせそうなところを抽出し、アレンジを加えて、自分に合うように再構成した。これらの形式が、

確かに合理的だということに気づく。何を言っているのか伝わりやすい形式は、曖昧さを必然的に抱えるわたしの研究を他者に伝えるための武器になった。混沌とした思考を他者にわからない仕方でそのまま出すのではなく、他者に伝えるためにその思考を解きほぐす。厳密な論点に矛盾が生じていないか、研究史上の見落としが存在していないかなど、わたしが苦手とする部分にかんしては、さまざまな他者からの多大なサポートを得た。わたし自身の関心から少し離れたことを丁寧に研究することで、思わぬ発見に出会えるということもわかってきた。わたしの苦手な部分に手を差し伸べ、その部分を補い、その部分について教えてくれた人の大半が、本と理論と知識を愛する古典研究者たちだった。

なぜ共依存研究に行き着いたのか、それは共依存という事象をつうじてあからさまに現れてくる既存の倫理観に異議申し立たかったからである。ではなぜそんなことをしたかったのか、それはそういう倫理観によって苦しめられている人を見たからだ。わたしはかつてそういう倫理観に苦しむ人だったし、そういう人たちを苦しめる人だったし、今もそういう人になってしまう恐れのある人間だし、いまでもそういう倫理観に苦しむ人でもある。わたしにそういったことを教えてくれるのはいつも「他者」である。

「あなた」が自分を肯定できないのは、あるいは、「わたし」が「あなた」を単純に肯定できないのには、さまざまな理由がある。既存の倫理観を疑い、それとは別の倫理観を見つけない限り、結局「わたし」は「あなた」を肯定できない。「わたし」のことも肯定できない。「あなた」が不当に否定されている背景をあぶり出し、心から「わたし」が「あなた」を肯定したい。それが「わたし」を肯定することでもある。それは「わたし」が「あなた」を評価するというよりも、すでに「あなた」がもっているものを、別の角度から、そのまま表現するだけにすぎない営みだと思う。でも、そういった側面に「わたし」が言葉を与えることができれば、あるいは、そういう認識をもって「わたし」が「あなた」に接することができれば、「あなた」が少しは楽になるかもしれないし、その一瞬だけでも「あなた」は自分の「生」を肯定できるかもしれない。それが「わたし」の「生」を肯定することでもある。振り返ってみれば、こういった望みが、わたしが研究するようになったはじまりにひそかに存在していた。

4　はじまりの場所

わたしは今、研究「業績」を生み出さなければならないという切迫的な圧迫状態から、（大部分）特権的に解放される身となった。それなのに、何か「伝わらない」と苦しむときは、研究者として培ってきた書き方に依存している。それは何かに囚われているようだと思いながらも、自分が語ろうとすることや、自分と同じように曖昧さを抱えながら語ろうとすることが、まっとうに相手に伝わらず、ぞんざいに扱われることを今でも恐れている。それに、書を読むことのほうが、聴くことよりも圧倒的な労力を必要とするわたしにとって、古典研究に精通している研究者たちが、まぶしい存在であり続ける。自分にまったくできていない

ことを批判するのは居心地が悪いので、避けたいと思っているところもある。

古典研究に苦手意識がつきまとうわたしは、それとの距離の取り方が難しい。わたしには鷲田さんの語るような臨床哲学論が、ときにどうしても、古典を含む膨大な知識と見識をもって世界を見れる領域に達した人にのみできる話に聞こえてしまう。鷲田さんの文章の一見何気ない容易に見える表現の背景に多大な知識の力が備わっていて、それが存分に活かされているからこそ書ける文章だと感じることがある。臨床哲学はそんなことをやろうとしていた／しているわけではなくて、「専門知識がない人だって哲学できる」ということのほうが大切なのだろうと思っているにも限らず、どうしてもそう思ってしまうところがある。そんな気持ちは拭い去れないけれど、あるとき、大阪大学の別の専修の方が紹介されたある文章を読んだ。その文章の執筆者は、哲学者ではなく、「赤とんぼ」でも知られる著明な日本の作曲家だった。その方は大量の本を読んで大量の知識を得た経験の先で、そのあり方に疑問を覚え、そういう仕方をやめたという。作品を書き上げるまでに何度も推敲するような仕方ではなく、日々の生活のなかにこそ創作の苦しみがある、つまり、日々を生きることによって創作が生まれるというようなことが書いてあった。そして、自分が真だと思うことを追求する信念が説かれていた。異分野の方の話だったけれど、臨床哲学のことを思い出した。そのとき、不思議なことに、素直によどみなく、「知識ではなく…」という視点にうなずけた。

自由作文のような文章を書いていたころから一周して、はじめに戻ってきた感じがある。臨床哲学を知ることで、語り方や書き方の再考が求められているように感じる。特定の「あなた」と、「わたし」自身とが関係したからこそ紡ぎだされ、「あなた」が語りかけてくれたからこそ見いだせたものについて、その人たちを思い浮かべ、その状態をそのまま表現できるような語り方に、もう一度挑戦できるのかもしれない。今も学術的に語られることでこそ守られるものがあるという気持ちには変わりはない。最近、「実際にそういうときがある」のだとつきつけられるような経験もした。わたしが考える意味での「研究」だって、聞こえない声が聞こえるようにするために多大な貢献をしてきた。これからもそういうものは引き継いでいきたい。でも、もう一度、別のあり方に挑戦したいと思う。今、わたしは、はじまりの場所にいるのだろう。